

「かな」について

加藤 幸一

かなという語の原形は「かりな」(仮り名・借り名)で、それが「かへな」と変化したもの。「な」は文字という意味で、漢字を「本字」と考ふる立場から漢字の仮りの文字という意味になる。

かなとは、ふつう曲線が主である「ひらがな」と直線が主である「かたかな」とをさす。広義には万葉かな(真仮名)も含まれる。ひらがな・かたかなの数は、一九四六年(昭和二十一年)に「現代かなづかい」で、戦前に使われていた(平)ゑ(エ)はなくなり、基本形四六字とまとめた。

一九〇〇年(明治三十三年)以前には、ひらがな・かたかなともにいろいろな字体があり、数が一定していなかった。それらの字体をひらがなの場合には「変体かな」、かたかなの場合には「異体かな」という。特に変体かなは、一音に多数の文字があり、教育や社会生活に不便であった。そこで一九〇〇年に小学校施行規則によって、一音一字とまとめたのである。それが、現代のひらがな・かたかなの字体である。

かたかなという名称は、アは「阿」の尸から、イは「伊」のイからというように、漢字の一断片である。扁・旁・冠・脚などからできている例が多いため、呼ぶかたかなは、発生当時から現代に至るまで漢文訓点用あるいは漢字と混用して使用されていた。

一方、ひらがなは、ひらがなの「ひら」が平易・通俗の意味からきたともいわれるが、はっきりしない。ひらがなは漢字(奈良時代の万葉かなに使われた漢字)を書きくずし、草書化しつくし、さらに女子の手で芸術的に洗練しつくされたもので、平安初期に発達した。そして、ひらがなは、単独で用いられた。(後世になると、片かなと同様に漢字とともに用いられるようになる)

平安時代中期、紀貫之は「土佐日記」の冒頭で「男とすなる日記といふものを、女としてみむとするなり」と女性が書いたようによそおって、かな文で書きはじめている。これは当時、男性は漢文で日記を書いたのに対し、女性は、

ひらがなで日記を書いていたからである。漢文にも達者な貴女が女性の立場にたつて、あえて、かなで日記を書こうとしたのである。このように「漢字が男手といわれるのに対して、女性の手によって使われたひらがなを、女手」といつたのである。

いろは歌四十七文字

ひらがな四十七文字を重ならないように使つて、仏のこころを、七五調の歌にしたもの。習字の手本として利用された。

「色は匂へと散りぬるをわか
世たれそ常ならむ有為の興山
今日越えて浅き夢見し酔ひる
せず」

(「花が美しく咲きにおつても、いつかは散つてしまふように、この世ははかないものである。しかし、生死を越えて悟りの境地に達すると、つまらぬことに迷わなくなる」という意味)

かなの発達

大	加	和	遠	留	奴	利	知	止	部	保	仁	波	呂	以
た	か	わ	を	を	ぬ	ぬ	ち	と	へ	ほ	に	は	ろ	い
た	か	わ	を	を	ぬ	ぬ	ち	と	へ	ほ	に	は	ろ	い
不	計	未	也	久	乃	為	字	武	良	奈	祢	川	曾	禮
ふ	け	ま	も	く	の	の	を	を	ら	ふ	ね	つ	つ	代
ふ	け	ま	も	く	の	の	を	を	ら	ふ	ね	つ	つ	代
寸	世	毛	比	患	之	美	女	由	幾	左	安	天	衣	己
寸	世	毛	比	患	之	美	女	由	幾	左	安	天	衣	己
寸	世	毛	比	患	之	美	女	由	幾	左	安	天	衣	己
寸	世	毛	比	患	之	美	女	由	幾	左	安	天	衣	己

「主な変体かな」昭和五十二年三月十日
字体は、野村ら社の変体仮名帳及び柏書房の「かな大字典」を参考にした

う	い	あ	平	安
字	以	あ		假
う	伊	阿	主	愛
字	伊	阿		假
(有)	(意)	(愛)		
う	い	あ		

し	さ	こ	け	く	き	か	お	え
之	左	己	計	久	幾	加	於	衣
し	さ	こ	け	く	き	か	お	え
志	佐	古	介	具	起	可	於	衣
志	佐	古	介	具	起	可	於	衣
新	(散)	(許)	介	俱	支	閑		江
新	散	許	介	俱	支	閑		江

な	と	て	つ	ち	た	そ	せ	す
奈	止	天	川	知	太	曾	世	寸
な	と	て	つ	ち	た	そ	せ	す
奈	登	天	徒	地	多	楚	世	春
那	(東)	亭	津	(干)	堂	所	勢	須
那	東	亭	津	干	堂	所	勢	須

ほ	へ	ふ	ひ	は	の	ね	ぬ	に
保	不 <small>部の旁</small>	不	比	波	乃	祢	奴	仁
保	遍	布	飛	者	能	年	怒	尔
保	遍	布	飛	者	能	年	怒	尔
保	遍	布	飛	者	能	年	怒	尔
本	邊	婦	(悲)	者	能	年	(努)	耳
本	邊	婦	(悲)	者	能	年	(努)	耳

ら	よ	ゆ	や	も	め	む	み	ま
良	与	由	也	毛	女	武	美	末
羅	(餘)	遊	屋	茂	免	無	三	滿
羅	(餘)	遊	屋	茂	免	無	三	滿
	(餘)		(夜)	裳	馬	(舞)	見	万
	(餘)		(夜)	裳	馬	(舞)	見	万

ん	を	ゑ	ゐ	わ	ろ	れ	る	り
无	遠	恵	為	和	呂	礼	留	利
ン	を	ゑ	ゐ ぬ	わ わわ	ろ	れ れ	る	り り
	越	衛	井	王	路	連	留	利
	越	衛	井 井	王 王	路	連	る る	り り
							流	里
							は 流 類	里 里

かたかな一覧表 (フリガナ用国際大百科事典付)

ア	阿の扁の行体「ア」
イ	伊の扁
ウ	宇の冠
エ	江の旁。もとハヤ行のもの
オ	於の古体「於」の扁
カ	加の扁
キ	幾の草体の「衣」の略。「き」の終画略
ク	ク「ク」の第二画まで
ケ	介の異体「介」
コ	己「己」の行体に基づき、第二画までを直線化
サ	散の初三画
シ	之の行体「シ」
ス	須の旁の草体
セ	世の草体
ソ	曾の初二画
タ	多の略
チ	千の行体
ツ	川、また、州の略体
テ	天の第三画まで、「テ」の転
ト	止の初二画
ナ	奈の初二画
ニ	二
ヌ	奴の旁
ネ	捺の扁

ノ	乃の略体
ハ	ハの草体
ヒ	比の略
フ	不の初二画
ヘ	「へ」の草体。「へ」は「部」の省文
ホ	保の終四画
マ	方「方」の草体
ミ	三
ム	牟の初二画
メ	女「メ」の略
モ	毛の略
ヤ	也の草体
ユ	由の上右二画
ヨ	興の上右二画
ラ	良の初二画
リ	利の旁
ル	流の終りの部分
レ	礼の旁
ロ	呂の上部
ワ	輪の象形。また「和」の旁
ヰ	井の草体
ヱ	恵の草体の直線化
ヲ	手「ヲ」の初三画
ン	(象徴的記号)

踏まれても
根がよくしるべ
やかく花さく
春は来ぬべし

(注)
と(も) ヤ(ヤ)
く(く) の(か)
し(し) 春(春)
そ(道) 来(来)
そ(之) 来(来)

わが花さく
春は来ぬべし

飯田 亦尾綱氏による越谷市立東中学校
第21回卒業生へのはなむけのこぼり
(昭和五十三年三月)